

『吉川三国志』成立の過程と環境 ・ 時代背景と作家環境から

207A1261 袴田郁一

◇はじめに

(1) 「三国志」について

本レジュメでは正史『三国志』と区別して、吉川英治の著作『三国志』を『吉川三国志』と称す。

また、『三国志』を題材とする創作ジャンルを総称してカッコ付で「三国志」と記す。

・『三国志』・・・中国三国時代の史実を記した正史。晋の陳寿撰。魏書二十卷、蜀書十卷、呉書二十卷の全六十五卷。……現行の『三国志』の刊本は南朝宋の裴松之の注がついて、……「魏志倭人伝」の日本に関する記述は、日本上代史研究に不可欠のものである。

・『三国志演義』・・・中国口語章回小説。元末明初の羅貫中の作。百二十回。後漢末に魏、呉、蜀の三国が天下を争った史実をもとにした歴史小説。
……日本では天竜寺の僧が訳した『通俗三国志』をはじめ、全体または一部を素材とした翻案は多い。……『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』とともに四大奇書といわれる。

(2) 日本近代文学としての「三国志」

▼国文学史において、国産に限定せず、「読まれた」という事実を重んじる見方もあるのではないか。江戸時代以来深く読まれてきた「三国志」も日本古典と数えることができる。(桑原武夫『三国志』のために)¹⁾

『三国志演義』は江戸時代に日本に伝来して以後、日本文学の中の一ジャンルを築き、また他の文学と相互影響し合ってきた一面がある。

そして近世、現代に関する先行研究は多数あるものの、「近代日本における「三国志」受容」に関しては極めて乏しい。『吉川三国志』をテーマとして、日本近代文学の側から、近代日本で「三国志」がいかにか受容されていたかを探る意義はあると考える。

Ⅰ．概要

(1) 書誌

吉川英治『三国志』

- ・初出 『中外商業新報』(夕刊)ほか四紙 昭和十四年八月二十六日～十八年九月五日
- ・所収 『三国志』全十四巻、大日本雄弁会講談社 昭和十五年～二十一年
- ・定本 『決定版 吉川英治全集』二四巻～二七巻、講談社 昭和五十四年～五十五年
- ・底本 『三国志』全八巻、講談社文庫 昭和五十五年～五十六年

※エディションにはこの他十種ある

(2) 梗概・登場人物

『三国志演義』とほぼ同様

冒頭に劉備青年期のオリジナルエピソードを加え、一方で完結は諸葛亮の死没まで

『三国志演義』の「語りなおし」と言える

Ⅱ．成立の背景

『吉川三国志』の成立過程・環境を考えるにあたっては、以下の二通りを考えている

- ・ どのような「三国志」受容の中で成立したか
 - ・ どのような時代背景・作家環境の中で成立したか
- 本発表では後者を扱う

(1) 戦争と文学

五五五

(2) 戦争と吉川英治

鳥越信 「吉川英治は封建主義・体制順応主義」

◆二度の中国渡航

- ・ 昭和十二年七月、毎日新聞社特派員として天津・北京へ
- ・ 昭和十三年九月、ペン部隊として漢口、南京方面に従軍

▼昭和十三年八月に内閣情報部は文学者と懇談会を開き、漢口攻略戦への文学者の従軍を要請、それを受けて同年九月に陸海二班に分かれて二十数名に上る文学者が現地へと出発した。(『日本文学新史・現代』第三章)

▼(八月二十三日)内閣情報部から文芸家協会についての相談があり、吉川英治もその懇談会に招かれて出席した。人選は文芸家協会の会長である菊池寛があたり、……二十二人が選ばれた。……作家を動員した意図は、漢口作戦に従軍させることで銃後文学の発展に寄与させようというねらいだったが、それほど強い要請ではなく、作家たちも比較的気軽に出かけた模様だ。(尾崎秀樹『伝記 吉川英治』)

▼従軍二回、北支中支の黄土を踏んでから、私は、少年時代にも耽読した三国志演義を、もういっぺん読み返してみた。そして、再読して得た大きな意義と新しい興味を覚えて、遂にこの執筆を思いついた。(吉川英治『三国志』巻の一序文)

文芸家協会会長の菊池寛と吉川英治は親友の間柄で、この従軍中でも行動を共にしていた。吉川が「ペン部隊」の中心的な位置にいたことが窺える。そのような行動が『吉川三国志』執筆の直接の動機になったことが、その序文にはっきりと示されている。

◆海軍との関係

- ・海軍軍司令部臨時戦史部、勅任官待遇(佐官相当)に任命される
- ・『大日本海戦史』の執筆協力(のちに企画中止)
- ・海軍の要請による執筆、講演、視察多い。

この他、敗戦ショックで数年に渡って筆を折るなど、吉川英治と戦争をめぐるエピソードは少なくない。

一大衆作家として、「草莽の臣」として、国難の中でできる限りの協力をした。

(3)戦争と「三国志」

▼呉、蜀、魏の三国鼎立に纏るこの大歴史小説「三国志」は、大衆文壇の第一人者吉川氏を得て新しい興味と感銘を盛ることと信じます。背景は今や皇軍活躍の天地、新東亜の建設と併せ考えて頂ければ興味は倍増することと思えます。……『吉川三国志』新聞広告)

▼今日の日支関係からも同胞中国人についての認識を深めたいと考えたことが執筆動機のひとつ。(村上知行『三国志物語』(大友)

▼ここに鈍骨を呵して訳筆を執ったのは、自分の興味も固よりですが、日支両国が現在の如き関係にある際、之によって幾分なりとも、支那という国を知る助けになったな

らばと、思ったからに外なりません。：(弓館芳夫『三国志』)

日中戦争は敵国中国に対する関心と呼び、結果として日本における中国物の受容、「三国志」の受容を高めることになった。

『吉川三国志』もその流れを受けて執筆された作品であったことが序文、広告から窺える。

この様に作品周辺、作者周辺が共に当時の戦争と深く関係していた本作であるが、戦争はその内容にも影響を及ぼしていたのだろうか？

目 三 『吉川三国志』の評価

(1) 『吉川三国志』の主な先行研究・評価

松本昭・・・

天地の悠久さと人生の一瞬。

『宮本武蔵』の「個の求道」から「天の意」「自然の理」という中国古来の思想へ。

「民心の集約」の強調。

▼天下の乱は、天下の民草から意味なく起るものではない。むしろその禍根は、民土の低きよりも、廟堂の高きにあった。川下よりも川上の水源にあった。政を奉ずる者より、政を司る者にあった。地方よりも中央にあった。けれど腐れる者ほど自己の腐臭には気付かない。(『吉川三国志』)

乱国の民衆が、心から欲しているのは、……この人なら！と信じられる人に拠って、安心を求めたいのである。(『新書太閤記』)

「天の意」と「民心」は、治国平天下の要諦であり、これこそ、いま英治が政府の要路に対して発する警告ですらあった。(松本昭『吉川英治 人と作品』)

尾崎秀樹・・・

▼吉川英治が見たものは、はげしい戦乱のなかにあっても、変わらない人の表情と、自然の姿であった。戦禍にもたゆまず農耕にいそむ農夫たち、家を焼かれてさまよう流民の群、……「三国志」一巻を、いわば壮大な民衆の歴史ドラマに組み立てようとした彼の悲願の底に、私はその実感のうずきを読みとることができるように思う。(尾崎秀樹『吉川英治 人と文学』)

立間祥介・・・

未完

(2) 『吉川三国志』受容の一例

- ・戦後の「三国志」ブームを築く
- ・韓国における翻訳本の出版¹¹⁾

戦争という束縛がなくなって以降も、好評価で受容されていた様子が分かる。

◇まとめ

本作は日中開戦という当時の社会情勢をきっかけに執筆されており、また吉川英治は民間の大衆作家という立場からではあったが軍部や国家に近い立場にあった。

しかし本作がいわゆるプロパガンダやナショナリズムの露骨な発露の場として用いられることはなく、吉川は綿密な資料考証の元、あくまで原典『三国志演義』に準拠した。仁・義や勸善懲悪といった『三国志演義』が持つ儒教的価値観の引き継ぎである。前述の松本昭氏の評価にあるような「民の心」の重視は、この様な『三国志演義』の価値観に基づいたために表わされたものであると考えられる。

「三国志」という当時の情勢にあっては大変難しい題材を扱ったにも関わらず、あくまで従来的一般大衆の視線を失わなかった本作は、大衆作家吉川英治ならではの作品と言える。

そして戦争の束縛が失われた昭和二十年以降にあっても、『吉川三国志』は大いに受容され、近現代の日本「三国志」のスタンダードたる地位を築いたのである。

◇参考文献

別紙資料

- ¹⁾ 参考資料1 『三国志演義』と『吉川三国志』本文比較」を参照
- ²⁾ 吉川英治 『三国志』八巻解説(筆・駒田信一)
- ³⁾ 参考資料2 「日本史略年譜」を参照
- ⁴⁾ 長谷川泉編 『日本文学新史・現代』第十六章(筆・鳥越信)
- ⁵⁾ 吉川英治の軍部への協力は松本昭『吉川英治 人と作品』に詳しい
- ⁶⁾ 『伝記』吉川英治』父 吉川英治』『吉川英治 人と作品』
- ⁷⁾ 金文京 『三国志演義の世界』